

# 短期大学におけるAI活用教育の枠組みの構築

## Implementation of Framework for AI-Applied Education in a Junior College

亀田 多江 石川 智仁 川島 秀明 石川 由紀子  
青野 健作 畑 由美子 石井 健司

### 1. はじめに

2022 年 11 月に OpenAI 社により ChatGPT が公開されてより、世界中で広く生成 AI が活用されるようになり、AI の幅広い可能性が認識され、第 4 次 AI ブームの幕開けともなる「新しい時代」に入った<sup>[1]</sup>。ビジネス分野では、ChatGPT の公開直後から、多くの企業が AI 技術への認知と期待を急速に高め、大企業を始めあらゆる分野の企業において、積極的に AI 技術の導入を試み、業務の効率化から新たなサービスの創出まで、勢力的に取り組んできた動向が顕著にみられる<sup>[2][3]</sup>。大学教育分野でも、ChatGPT の公開直後から積極的に授業での活用・研究を進めている教員・研究者が多く、情報共有が活発に行われてきた<sup>[4][5]</sup>。一方で、大学全体での教育方針としては、慎重に向き合ってきた大学が多く、積極的活用よりも、教育への妨げにならないことへの配慮を前面に出している教育機関が多かった<sup>[6]</sup>。しかし、公開から 1 年経過した頃からは、徐々に積極的活用に向向きになっていく大学が見られるようになった。

創価女子短期大学においては、2023 年度より、ビジネス現場で生成 AI が積極的に活用され始めた社会動向に注目し、これからの社会で有為な人材を育成するためには、短大教育においてもタイミングを逃さず ChatGPT など

の生成 AI を活用できる人材を育成していくことの必要性を認識し、水元昇学長のリーダーシップのもと、全学挙げて AI を活用した教育推進に積極的に取り組んできた。

本論文では、本学における全学的な AI 活用教育への取り組みについて報告する。2 章では、導入への事前取り組みの概要と、その中で発足された AI 活用推進 WG（ワーキンググループ）の取り組み概要について述べる。3 章では、AI 教育の可能性と学生の状況を実践的に把握するために 2023 年度の授業で行った「AI を活用した観光プラン提案」演習とコンテストの概要をまとめる。4 章では、2024 年度からスタートした全学的な「SWC-AI 活用教育の枠組み」と具体的な科目体系をまとめ、5 章で本取り組みの総括をする。

## 2. 本学における AI 活用教育への取り組み概要

### 2.1 事前取り組み

本学においては、ビジネス現場で生成 AI が活用され始めた社会動向に対して、短大教育においてもタイミングを逃さず全学的に AI 活用教育を推進するため、まず導入に向けて、① FD（ファカルティ・ディベロップメント）会議の開催、② AI 活用推進 WG（ワーキンググループ）の発足、③ 学外への新プロジェクトの発表を行った。

FD 会議は、2022 年 11 月に OpenAI 社から ChatGPT が公開された直後の 2023 年 4 月、石井健司副学長の担当で「ChatGPT と大学教育」とのタイトルで開催した。そこでは、ChatGPT の仕組み、できること、社会に与える影響、教育における活用の可能性、活用のポイント、強みと弱み等が講義された。また、参加教員はその場で実際に ChatGPT の利用も開始した。本 FD 会議には専任教員のほぼ全員が参加した。

FD 会議を踏まえて、推進ワーキンググループとして AI 活用推進 WG を発足し、ICT 教育推進委員会委員長を中心に 6 名の構成員で取り組みを始めた。石井副学長はアドバイザーとしてサポートにあたった。WG での取り組みの詳細は 2.2 節に述べる。

学外への新プロジェクトの発表については、2023 年 5 月、本学の新たな取り組みを推進する新プロジェクト「Next 創短！ 2024」<sup>[7]</sup>の 1 つとして、

「AIで授業をパワーアップ」とのタイトルで、授業にAIを導入しAIを活用できる人材育成を目指していくことを、オープンキャンパス等で対外的に発表した。

## 2.2 AI活用推進WGの取り組み

本学のAI活用推進WGは、2023年4月、本学で生成AIをはじめとするAIを積極的に活用し、効率的・効果的に質の高い教育を行っていけるよう、また社会でAIを活用し活躍していける人材を育成していけるよう推進することを目指して発足された。

AI活用推進WGでは、2023年5月から、AI活用推進会議を月に1～2回、これまでの1年3か月（2024年7月現在）で16回開催してきた。会議においては、（1）短大教育におけるAI活用全般についての検討・推進、（2）日々新たなサービスが展開され活用されているAIに関する情報の共有、（3）WGメンバーが自らの教育研究活動において積極的にAIを活用していくための触発・計画・推進、（4）WGの取り組みの総括・紀要論文の執筆推進を行ってきた。また、本WGが中心となって、2024年4月と5月にFD会議を開催し、全教員がAI活用教育を意識し推進していけるようにした。以下に、会議で取り組んだ内容の詳細を示す。

- （1）短大教育におけるAI活用の検討・推進においては、表1に示す通り①短大教育におけるAI活用についてのフリーな議論（第1回～第9回会議）を行い、④短大教育におけるAI活用の枠組み作りについての議論（第5回～第9回会議）に繋げ、⑤「SWC-AI活用教育の枠組み」としてまとめる（第10回～第15回会議）に至った。枠組みの詳細は4章で述べる。
- （2）AIに関する情報共有（表1の③）は、随時、WGメンバーが各自で情報収集をしたり、試行錯誤をしながら活用したり、AI関連のセミナー等に参加したりして得られた情報を会議で共有してきた。
- （3）WGメンバーの教育研究活動におけるAI活用の推進については、表1に示す通り②各自の授業・研究において考えられるAI活用について意見交換を重ねることで、プロジェクトメンバー一人一人がAI活用への意識を高めることができ、それぞれの教育研究活動でAIを活

表1 AI活用推進会議の概要とその背景

年月	会議・イベント	主な内容
2022年11月	ChatGPT 公開	
2023年4月	FD「ChatGPTと大学教育」	ChatGPTの概要について教員間で情報共有。ChatGPTの試用開始
2023年4月	「AI活用推進WG」の発足	学内のAI活用を推進するワーキンググループを発足
2023年5月	新プロジェクト「Next創短! 2024」で3つの取り組みを発表	取り組みの1つとして「AIで授業をパワーアップ: AI×授業=AIを活用できる人材育成」を発表
2023年5月	第1回AI活用推進会議	AI活用推進WGが主体となって推進会議を開始。 ①短大教育におけるAI活用についての議論(第1回～第9回会議) ②各自の授業・研究におけるAI活用について意見交換(第1回～第11回会議) ③AIに関する情報共有(随時)
2023年5月	第2回AI活用推進会議	①、②、③
2023年6月	第3回AI活用推進会議	①、②、③
2023年7月	第4回AI活用推進会議	①、②、③
2023年7月	第5回AI活用推進会議	②、③、 ④短大教育におけるAI活用の枠組みについての議論(第5回～第9回会議)
2023年8月	第6回AI活用推進会議	②、③、④
2023年9月	第7回AI活用推進会議	②、③、④
2023年10月	第8回AI活用推進会議	②、③、④
2023年11月	第9回AI活用推進会議	②、③、④
2024年1月	第10回AI活用推進会議	②、③、 ⑤「SWC-AI活用教育の枠組み」についての議論(第10回～第15回会議)
2024年2月	第11回AI活用推進会議	②、③、⑤
2024年2月	第12回AI活用推進会議	③、⑤、 ⑥AI活用授業計画の共有
2024年3月	第13回AI活用推進会議	③、⑤、 ⑦AI活用授業内容の共有(第13回～第16回会議)
2024年4月	FD「短大AI活用教育について」	本学のAI活用授業での学習内容の共有と議論
2024年5月	FD「短大AI活用教育について」	本学のAI活用授業での学習状況の報告と議論
2024年5月	第14回AI活用推進会議	③、⑤、⑦
2024年6月	第15回AI活用推進会議	⑤、⑦、 ⑧紀要論文についての議論(第15回、第16回会議)
2024年7月	第16回AI活用推進会議	⑦、⑧

用していく流れを作ることができた。その結果、各自の授業での活用方法の検討を進めることができ、これらを基に「SWC-AI 活用教育の枠組み」を固めていった（第1回～第11回会議）。第12回会議（2024年2月）では、2024年度の⑥ AI 活用授業計画を共有し、その後第13回～第16回会議で、具体的な⑦ AI 活用授業内容の共有を行っていった。このようにして、WGメンバーを中心に、AI活用教育の枠組みに繋がる授業展開を進め、全学的なAI活用教育の土台を整えた。

- （4）WGの取り組みの総括としては、メンバーの総意で紀要論文の執筆を決め、本学における全学的なAI活用教育への取り組みを、広く発信することとした（表1の⑧、第15回・第16回会議）。

更に、本WGが中心となり、2024年4月と5月にFD会議を開催し、WGでまとめてきた「SWC-AI 活用教育の枠組み」の概要を全専任教員で情報共有すると共に、1年次の必修科目で学生が共通基盤として学ぶ「AIを活用したスタディスキルの基礎」（コンピュータリテラシーで実施）の内容を確認し、AIを活用した教育について意見交換を行った。このように、全教員が意識をしてAI活用教育を推進していけるようにした。

### 3. 「AIを活用した観光プラン提案」演習とコンテスト

本学では、「Next創短！2024」の取り組みの一つ「AIで授業をパワーアップ」として、2024年度から本格的に授業にAIを導入し、AIを活用できる人材育成を目指すこととなった。本格導入を前に、2023年度の春学期においては、1年次の必修科目「情報ネットワークの基礎」において、ChatGPTの概要と仕組み、本学におけるAI活用のポリシー・注意事項を説明した上で、活用方法を案内し、授業での利用をスタートした。注意事項としては、次の3点について確認した。①機密情報・個人情報は入力しないこと、②不正確な情報、誤解を招く情報を生成したり、不快な内容や偏った内容を生成することがあることを認識し、情報が正しいか確認・判断をしながら活用するようにすること、③学びの向上のために活用すること（安易に活用して自身の勉学の妨げにならないように注意すること、ChatGPT等の生成AIを活用した資料はその旨を明記すること）。

その上で、2023年度の秋学期においては、1年次の必修科目「ビジネス

コンピューティング」に、学生の生成 AI 活用を促す演習として「AI を活用した観光プラン提案」を取り入れ、コンテストも実施した。演習のねらいは、2024 年度の本格導入を待たずして、在学の学生がいち早く AI の特性を理解した上で価値的に積極的に AI 活用ができるように教育するためである。また、短大全体の AI 活用教育の枠組みを考える第一歩として、実践的な AI 教育の可能性と学生の状況を把握するためである。本章ではその演習とコンテストの概要をまとめる。

### 3.1 「AI を活用した観光プラン提案」演習の概要

「AI を活用した観光プラン提案」演習は、授業「ビジネスコンピューティング」の第 1 回、第 2 回の授業で行った。本授業はビジネスにおいてコンピュータを有効に活用していく基礎技能を身につける授業であり、本演習はビジネス実務における AI 活用の演習として行った。

「AI を活用した観光プラン提案」は、生成 AI（ChatGPT 等）を用いながら、観光プランを練り、「企画提案書」を作成することとした。また、企画提案書の作成にあたって、どのように生成 AI を活用したのかをまとめた「AI 活用レポート」も合わせて提出するようにした。

演習としては、まず①演習のねらいを示した上で、作成する「観光プラン」の設定条件を提示し、提出物は「企画提案書」と「AI 活用レポート」であることを、サンプル（図 1、図 2）を見せながら説明した。次に②実際に AI 活用レポートのサンプルを用いながら、企画検討した手順に従って、ChatGPT の活用練習をしていった。

AI 活用レポートのサンプルには、作業を通して AI 活用のポイントを学べるようにアドバイスを明記した（図 2 の赤字）。記載したアドバイスの例は次の通りである。

#### < AI 活用ポイントのアドバイス例 >

- ・始めに詳しい条件設定を入れて質問し、より良い回答を得やすくしよう
- ・不正確な情報で回答されることがあることも学ぼう
- ・継続的な対話で情報をブラッシュアップしていこう
- ・より明確な条件で指示することで、必要な情報を得やすくしよう
- ・これまでのやり取りをベースに、特色をまとめてもらうように指示して

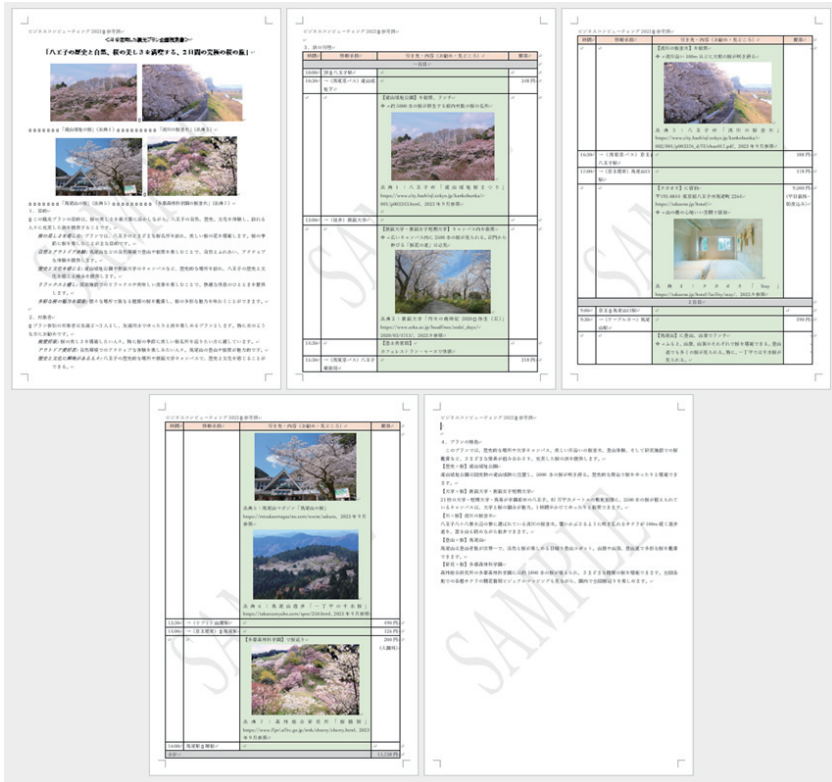


図1 企画提案書のサンプル（イメージ）

みよう

- ・自分の文章の校正をしてもらうのも良いでしょう
  - ・キャッチフレーズ案の提示を指示してみよう
  - ・これまでのやり取りを基に、改めて **ChatGPT** にプランの目的をまとめてもらい、資料のブラッシュアップに活用してみよう
  - ・これまでのやり取りを基に、改めて **ChatGPT** にプランに適した対象者をまとめてもらい、資料のブラッシュアップに活用してみよう
- また、AIを活用した観光プランの作成を通して学んでもらいたいポイント



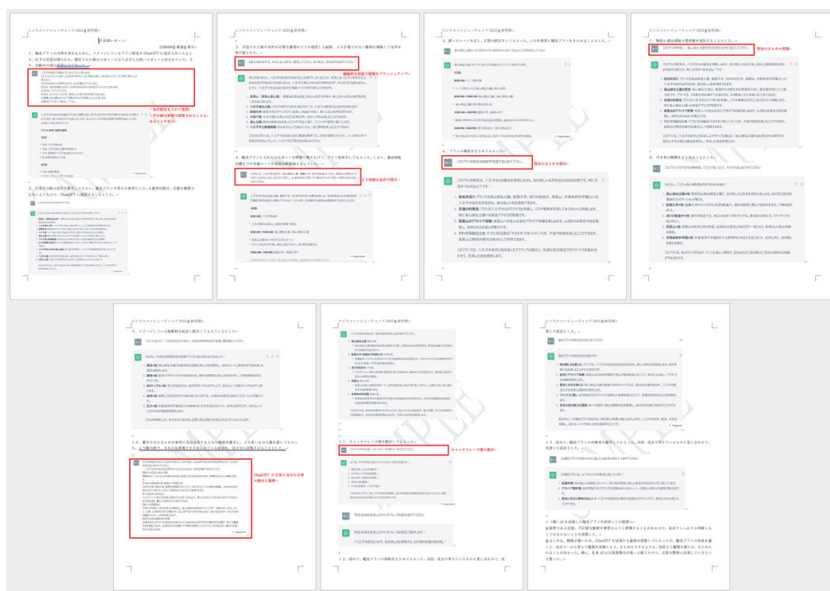


図2 AI活用レポートのサンプル (イメージ)

トの一部を、感想例として次の通り示した。

#### < AI を活用した観光プランを作成しての感想例 >

便利である反面、不正確な情報を事実のように表現することがあるので、自分でしっかりと判断しなくてはならないことを実感した。

はじめは、精度が悪いため、**ChatGPT**を活用する価値が実感しづかったが、観光プランの作成を通して、自分で一から考えて情報を収集したり、まとめたりするよりも、効率よく情報を得られ、まとめられることが分かった。特に、生成 **AI** は文章表現力が高いと感じたので、文章の整理に活用していきたいと思った。

### 3.2 「AI を活用した観光プラン提案」コンテストの概要

ビジネスコンピューティングの授業履修者を対象に、「AI を活用した観光プラン提案」コンテストを、授業での学びをベースに提出された「企画提案書」と「AI 活用レポート」で実施した。



審査は、授業担当者によるクラス内審査を行った上で、学長と副学長による本審査を行い表彰した。評価ポイントは次の3点とした。①魅力的な観光プランである（プラン内容が魅力的、行ってみたいと思わせる、提案者の個性・オリジナリティが感じられる）、②AIの活用法が優れている（AIを効果的に活用できている、AIを工夫して活用できている）、③魅力的な企画書である（プランの魅力が良く伝わる企画書類である）。表彰内容は、最優秀賞1件、優秀賞1件、特別賞2件、奨励賞17件とした。

審査結果は本学のホームページに紹介された<sup>[8]</sup>通りである。ここでは上位表彰された提案プランのキャッチフレーズを記す。

<最優秀賞>

「岡山の自然と歴史の舞台で織りなす昼夜異色幻景」

<優秀賞>

「でーれー盛りだくさん！晴れの国岡山、  
大人のソロ活女子旅」

<特別賞>

「桜の魔法、きよすで癒しのひととき」

「小樽の旅、心に残る美と楽しさの融合」

表彰式の様子を図3に示す。表彰式においては、水元学長から次の主旨の挨拶があった。「AIは道具でそれを使う人間の側が大切です。上手く使いながら素晴らしい価値創造をする。これからの時代の先駆けとして皆さんは道を拓いたと思います。来年入学する40期生とともにNext 創短！2024を新たな節として取り組んでいきましょう」<sup>[8]</sup>

受賞者の声<sup>[8]</sup>の一部は次の通りである。

- ・AIが身近なものになってきている現代で、AIを上手く活用できる力を授業で学べたことは、とても良い経験になったと思っています。これからも今回学んだことを活かして積極的に活用していきたいです。
- ・AIと一緒に旅行の計画を練るパートナーと思いながら作業ができ、楽しかったです。唯一無二の観光プランにしたいと考え、ChatGPTやGoogle、観光雑誌、SNSを使って観光地を調べ、自分の満足するプランを完成させ



図3 コンテスト表彰式の様子

る事ができました。*ChatGPT*とのやり取りを重ねる中で、自分がAIを育てているように感じたり、一緒に計画を立てているかのように感じ、AIの利点を体感できました。一方で、提示される情報全てが正しいとは限らないことも学びました。

- ・AIは瞬時に目的にあった文章を考えることやアイデアを出すことが得意だと感じました。一方で正確な情報をAIから得るのは難しいと分かりました。AIはわからないことがあったとしても自分の知っている情報を組み合わせて実在しないものを提示してくる場合が多かったです。また、こちらの質問の質の高さの重要性も理解できました。実際文章を考えてもらう際には文字数、ワードの指定などをする事でより自分が求めているものに近い答えを返してくれました。この授業でAIを活用してから、ちょっとした時に「AIに聞いてみようかな」という感じで日々の活用に積極的になることができました。これからもAIの特性を踏まえた上で活用していきます。

以上の通り、2023年度の1年生必修科目の授業を中心に、AI活用教育の本格導入の事前取り組みとして、「AIを活用した観光プラン提案」演習とコンテストを行った。これらを通して、AI活用のポイントを示しながら、活用練習を重ねることで、学生はAIの強みや弱み、特性を理解しながら活用していけるようになることが分かった。また、日々の学びや学生生活にAIを積極的に活用していく流れをつくれることも確認できた。よって2023年度の事前取り組みの実践は、短大全体のAI活用教育の枠組みを考える第一歩として、AI活用教育の可能性と学生の状況を認識することができた。また、学生がAIを価値的に積極的に活用ができる教育を検討する土台となった。

#### 4. 「SWC-AI活用教育の枠組み」

AI活用推進WGによる推進会議において、全学的なAI活用教育の枠組みとして「SWC-AI活用教育の枠組み」を構築してきた。本章ではその概要と具体的な科目体系をまとめる。

#### 4.1 「SWC-AI 活用教育の枠組み」の概要

「SWC-AI 活用教育の枠組み」(図4)においては、次の3つの枠組みを設定した。まず1年次春学期を中心に(1)「AIを活用したスタディスキル」の習得を行い、1年次秋学期から2年次秋学期にかけて(2)「ビジネス現場でのAI活用に生かせるスキル」の習得を行っていくこととした。また、2年間を通じて(3)「AI活用の理解と思考力の育成」を行っていくこととした。これらはAIを活用した国際ビジネス学科全体の授業の中に取り入れていくことで、「AIを活用した授業」の推進を行い、「AIを活用した人材育成」を行っていくものである。以下に、各枠組みでの具体的な学びをまとめる。

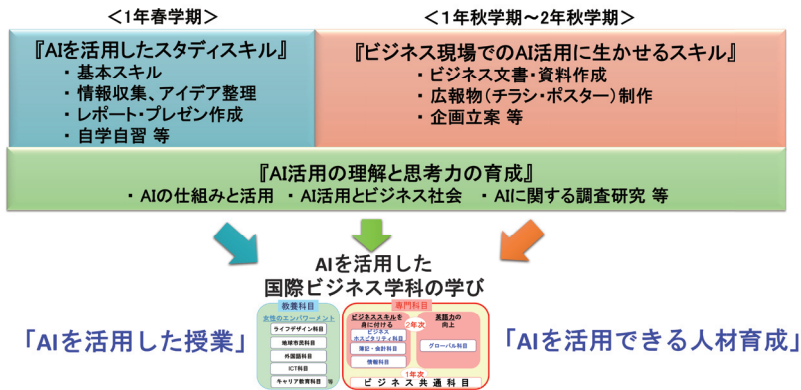


図4 「SWC-AI活用教育の枠組み」

(1) 「AIを活用したスタディスキル」の習得では、短大での学びにAIを活用していくためのスキル(スタディスキル)を習得していく。主な習得内容は次の通りである。

- ・AIを効果的に活用するための質問・指示入力方法などのAI活用基本スキル
- ・AIを活用した情報収集、アイデアの整理などのスキル
- ・AIを活用したテーマ検討、ストーリー作り、文章の添削などを通じたレポート作成、プレゼン作成スキル

- ・ AI を活用した学習例題の生成、問題作成と添削などの自学自習スキル
- (2) 「ビジネス現場での AI 活用に生かせるスキル」の習得では、ビジネス現場での AI 活用に繋がるスキルを実践的に学び、習得していく。主な習得内容は次の通りである。
- ・ AI を活用した目的に合わせたビジネス文書・資料の生成、校正、要約スキル
  - ・ AI を活用したイメージ画像生成やキャッチフレーズ生成等によるチラシ・ポスター制作スキル
  - ・ AI を活用した商品開発などの企画検討を行い、提案資料をまとめる企画立案スキル
- (3) 「AI 活用の理解と思考力の育成」では、AI 活用の土台となる仕組みの理解やサービス活用動向の理解を高め、価値的に活用していく思考力を育成していく。主な学びの内容は次の通りである。
- ・ AI の仕組みと活用に関わる技術、ツール、活用事例等の基礎知識を学び理解する
  - ・ ビジネスにおける AI 活用の現状と、ビジネス社会の変化について学び理解し、これからの社会について考える
  - ・ AI に関する調査研究を行い、AI を価値的に活用する思考力を育成していく

以上の3つの枠組みを本学の「SWC-AI 活用教育の枠組み」とし、これらに取り組むことで「AI を活用した人材育成」を行っていくこととした。

## 4.2 SWC-AI 活用教育の枠組みと科目体系（一部）

AI 活用推進 WG による推進会議では、「SWC-AI 活用教育の枠組み」を定めた後、“具体的な授業で取り組める AI 活用教育”と“それぞれの枠組みで習得するスキル・内容”をマッチさせ、枠組みに沿った科目体系としてまとめた。図5は、WG メンバーが担当する授業を中心にまとめた科目体系である（\*は一部の授業での AI 活用実施）。以下に各枠組みの主な科目と内容についてまとめる。

- (1) 「AI を活用したスタディスキル」の習得では、1 年次春学期の必修科



図5 SWC-AI活用教育の枠組みにおける科目体系 (一部)

目である「コンピュータリテラシー」でスタディスキルの基礎を習得することとした。また「基礎ゼミナール」では学びのテーマに基づいたレポート作成でAI活用による添削を行い、「英語Ⅰ」では英語ライティングにおいてAI活用による添削を行うなど、幅広い学びでスタディスキルを習得していくようにした。

- (2) 「ビジネス現場でのAI活用を生かせるスキル」の習得は、1年次秋学期の必修科目である「ビジネスコンピューティング」でAIを活用したチラシ作成やビジネス文書作成から始めることとした。2年生の選択科目の「メディア表現Ⅰ・Ⅱ」では、AIを活用した広報物の作成、企画立案に展開していく。更には、種々の授業で、表現力向上のために活用したり、社会課題解決に向けた提案検討や、考えの妥当性検証のために活用するなどし、スキルを習得・向上させていくようにした。

- (3)「AI 活用の理解と思考力の育成」では、1 年次春学期の必修科目である「情報ネットワークの基礎」で AI の仕組みと活用事例等の基礎知識を学び、加えて「ビジネス入門」の情報授業で AI 活用とビジネス社会の変化について学び AI の理解を深めるようにした。その上で、1 年次秋学期以降の選択科目「情報社会とビジネス」「ビジネスと情報システム」でビジネスにおける AI 活用について理解を広げ、「ゼミナール A、B」で研究を通して思考力を養っていくようにした。

このように、「SWC-AI 活用教育の枠組み」を実践していくために、具体的に科目体系として整理し、2024 年度春学期から各授業で取り組みをスタートさせることができた。これにより、「Next 創短！2024」の1つである「AI で授業をパワーアップ」を開始することができた。2024 年度春学期の各授業での AI 活用実践報告については、紀要論文「短期大学の授業における AI 活用の実践報告：教育現場からのケーススタディ」にまとめた。

## 5. おわりに

本論文では、本短期大学において、全学的に AI 活用教育を推進するために行ってきた AI 活用推進 WG を中心とした取り組み概要と、2024 年度春学期よりスタートした「SWC-AI 活用教育の枠組み」について述べた。

2 章では、AI 教育導入に向けた取り組み概要と、AI 活用推進 WG が進めてきた AI 活用推進会議の内容をまとめた。推進会議では、16 回にわたる会議を通して、6 人の WG メンバーが AI 活用に関する情報を共有しながら、短大全体の AI 活用教育についての議論を重ねた。それにより、WG メンバー一人ひとりの AI 活用に対する意識が高まり、各自の授業・研究への AI 活用の検討にも繋がり、それが全学的な AI 活用教育導入の推進に繋がった。

3 章では、2024 年度の AI 活用教育の本格導入に向けた事前の取り組みとして行った、2023 年度授業での「AI を活用した観光プラン提案」演習とコンテストについて述べた。演習の実践を通して、AI 活用のポイントを示しながら、活用練習を重ねることで、学生は AI の強みや弱み、特性を理解しながら活用していけるようになることが分かった。また、日々の学びや学生生活に AI を積極的に活用していく流れをつくれることも確認できた。これが、短大全体の AI 活用教育の枠組みを検討する土台となった。

第4章では、AI活用推進会議を通して構築した「SWC-AI活用教育の枠組み」について述べた。全学的なAI活用教育の枠組みとして、「AIを活用したスタディスキル」の習得、「ビジネス現場でのAI活用に生かせるスキル」の習得、「AI活用の理解と思考力の育成」の3つの枠組みを設定し、国際ビジネス学科全体の授業の中に取り入れていくことで、「AIを活用した人材育成」を推進していくことを述べた。また、それぞれの枠組みで習得する学習内容を具体的な授業に落とし込んだ科目体系にまとめ、2024年度春学期から各授業で取り組みをスタートさせたことを報告した。

本論文を通して、本短期大学では、第4次AIブームの幕開けとも言われた2023年より、AIを全学的に積極的に教育に活用していく立ち位置で、AI活用WGを立ち上げ、「SWC-AI活用教育の枠組み」をまとめ、2024年より全学的に教育での実践を開始することができたことを述べた。

今後の取り組みは、「SWC-AI活用教育の枠組み」における各科目の授業をしっかりと取り組んでいけるように、AI活用WGによる推進会議を継続的に実施しながら情報共有し、AI活用を推進していくことである。また、日々進化するAIサービスの情報をキャッチしながら、学生が授業や学生生活で質の高い学びを効率良く行っていけるように、また幅広くAI活用ができるスキルを習得していけるように、教育内容を随時更新していくことである。

激動の時代の中、このように先駆的な取り組みができたのは、学長を始めとする大学首脳の見識の明とリーダーシップがあったことと、このように取り組んで来れたことに感謝している。本学は、建学の指針の一つに「自己の信条を持ち人間共和をめざす女性」と掲げ、平和と調和の社会を担う女性リーダーの育成に力を入れている。学生達には、高度な情報社会となった現代社会でAIを活用できる力を一つの武器として身に付け、社会での活躍を通して、平和と調和の社会を担う人材となってもらいたいと願っている。そのためにも、平和と調和の社会を目指す目的観を見失わずに、あくまでもAIを道具として用いて、学生達が活躍していけるよう、これからも創立の精神、建学の指針に適った女性の育成を根本に、教育に取り組んでいきたい。



## 参考文献

- [1] 松尾豊「生成 AI 時代の人材育成」、第 8 回経済産業省デジタル時代の人材政策に関する討論会資料 5 (2023 年 6 月)、[https://www.meti.go.jp/shingikai/mono\\_info\\_service/digital\\_jinzai/pdf/008\\_05\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/digital_jinzai/pdf/008_05_00.pdf)、2024 年 9 月参照
- [2] Gartner「日本における ChatGPT の導入状況：2023 年」、<https://www.gartner.co.jp/ja/documents/4440799>、2024 年 9 月参照
- [3] 野村総合研究所「日本の ChatGPT 利用動向 (2023 年 6 月時点)」、[https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/knowledge/report/cc/digital\\_economy/2023\\_0622\\_1.pdf](https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/knowledge/report/cc/digital_economy/2023_0622_1.pdf)、2024 年 9 月参照
- [4] 国立情報学研究所「大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関 DX シンポ」」、<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/>、2024 年 9 月参照
- [5] 和久友親等「学習者の理解度に応じた自動問題生成 AI システムの開発」、日本教育工学会論文誌 48(2), 423-435, 2024
- [6] 武田俊之「大学は生成系 AI の影響をいかに認識しているか?」、日本教育工学会研究報告集 JSET2023-2-A14、2023 年
- [7] 創価女子短期大学「Next 創短! 2024」、<https://www.soka.ac.jp/swc/humanresource/developmentandsocialcontribution/next2024/>、2024 年 9 月参照
- [8] 創価女子短期大学「「AI を活用した観光プラン提案」コンテストの表彰式を開催」、[https://www.soka.ac.jp/swc/\\_tag/2023/11/10787/](https://www.soka.ac.jp/swc/_tag/2023/11/10787/)、2024 年 9 月参照